

小諸市農ライフアンバサダーに 武藤千春さんが就任！

むとうちはる

小諸市は、「小諸の農」のブランド化プロジェクトとして、「komoro agri shift プロジェクト」に取り組んでいます。このプロジェクトは、「つくる農から“つなぐ農”へ」という理念を掲げ、つくって終わりの農業から、つくってつながる農業へのシフトを目指しています。

この度、小諸市と東京の二拠点生活のなかで、市内で野菜づくりをしながら、作る人と食べる人をつなぎ、農ライフを実践されている武藤千春さんを、「小諸市農ライフアンバサダー」として委嘱しました。

武藤千春 CHI HARU MUTO

1995年、東京生まれ。2011～14年、アーティストとして活動。2015年よりファッションブランド「BLIXZY」のプロデュースを行い、企画・デザイン・PR・モデルなどをマルチに行う。また、ラジオパーソナリティーやMCとしても活躍中。現在は東京と小諸市での二拠点生活を送り、畑での野菜作りをおこなっている。2021年には農ライフブランド「ASAMAYA」を立ち上げ、農ライフや地域の魅力を伝えながらフードロス課題解決に向けた規格外・廃棄野菜のレスキュー活動も行うなど活動の幅を常に広げ、新しい生き方や価値観を発信している。



つくる農から“つなぐ農”へ
komoro agri shift





【対談】農ライフアンバサダー × 小泉市長

農ライフとの出会い

市長 武藤さんは、2019年から小諸と東京の二拠点生活をされていますが、小諸ではどんな暮らし・活動をされていますか。

武藤 初めは自分らしく自分のやりたいことを追求しようと、家族と小諸にきました。そのなかで、コロナ禍でたくさん時間ができたことで、農ライフと出会い、どんどんハマっていきました。

暮らしに、「農」を取り入れています。毎日が発見に溢れています。「食材がどのようにできるのか」「どうやって食卓のぼるのか」。小諸の皆さんにとっては当たり前かもしれないが、これまでの私には全く意識できていなかったこと



委嘱式 (2/10)

です。そういった感覚が築けたのは本当に大きく、「この感覚や暮らしを、自分と同じ若い世代に知ってほしい」と強く思いました。この思いが、いまの自分の生活や仕事に反映されています。

知ること、変わる

市長 いつも、様々な媒体で発信されていますが、その行動力やスピード感に驚かされます。「農業」そのものではなく、「農ライフ」というところにこだわっていますね。

武藤 私は、三年ぐらい前まで「仕事のために食べて、仕事のために寝る」という、仕事中心の生活を送っていました。同世代にもそういう暮らしをしている人がとても多いです。でも、私自身は「農」と触れ合うことによって、暮らし方がガラッと変わりました。

野菜を直売所で買うことで、「時期により食べられる野菜が違う」「作るひとによって味が全然異なる」ことがわかりました。野菜の苦さや甘さを感じ、つくった農家さんと交流する生活。これが当たり前じゃない地域って、意外と多いん

です。

自分の暮らしや日常を大切に、余白を生むことで、仕事や活動に新しいアイデアが生まれ、視点が変わります。そういったことから、自分や周りの人の可能性が広がるのかもしれないと感じています。

一緒に魅力を発信したい

市長 小諸の農産物は、土壌の豊かさや農家のこだわりから、非常に品質が高く、評価されています。武藤さんは、小諸で野菜づくりをする「農家」でもありますよね。

武藤 農業って、「人間が色々な手を加えてやっている」というイメージだったんですが、実際にやってみると、それだけではないですよ。

例えば、同じ小諸のなかでも、地域や年によって、種植えの季節が大きく違う。「自然が野菜・果物を育ててくれるんだ」と強く思いますし、大袈裟ですけど、地球のなかの自然の循環というものを感じます。

同時に、小諸には魅力的で面白い農家さんがたくさんいることに驚いています。皆さん

ん、誰にやらされるでもなく、とにかく熱中して、農業にのめり込んでいます。その姿を見て、話を聞いていると、こちらもワクワクします。

市長 スーパーに並んでいる農産物の裏には、作る人がいて、それぞれの思いや工夫があるはずなんです。そこを知ってほしいですよ。

武藤 最近、「玉ねぎはこのひとから、人参はこのひとから」と、楽しみながら野菜を買おうようになりました。「かかりつけのお医者さん」のように、農家さんと交流するのもいいですよ。知ること、選ぶこと、食べることも「農ライフ」です。

今年からは、耕作放棄地でワイン用ぶどうを作り始めています。小諸の地で畑に入りながら、皆さんと一緒に「農の魅力」「小諸の魅力」を発信していきたいと思っています！

今月から、小諸市農
ライフアンバサダー
武藤千春さんが
小諸のおもしろ農家
を紹介していきます！

※感染防止策を実施したうえで、取材・収録を行っています。

小諸 オモシロ 農家

10人いれば10通りの農との関わり方があります。小諸市農ライフアンバサダー千春が、この農場を営む農家の活力溢れたライフをお届け。

#01

御牧ヶ原大地を中心に林檎栽培を行う宮嶋林檎園は、林檎園としての歴史を重ねながら定番からオリジナル品種までさまざまな品種を家族で作り、さらにはハードサイダーというりんごのお酒作りにも挑戦している先進的な農家さん。「りんご作りは僕自身の知的好奇心を満たしてくれる材料。単純に探究心というか、楽しいことへの延長にりんご作りやハードサイダーがある。」先代が積み重ねてきた技術や知識を受け継ぎながら、自らもりんご作りに魅了され、農家だからこそできることをひたすら追求し続けています。「切った時に部屋中香りが広がるようなりんごを作りたい。香りが強いときっと翌年また食べたと思ってもらえる。そうやって香

りが想いに繋がっていくと思うんだ。」と、りんご作りのコンセプトも語っています。「常に新しいものを作っていきたいという想いがあります。ないものを作れるのが農家の強み。それに、これから温暖化だったり色んな影響があるから、りんご栽培が今と同じ形ですつと続くとはい思っていないんです。なので、今は海外でやっているような新しい栽培方法にもチャレンジしています。とにかくやりたいことはまだまだいっぱいありますね。」常にワクワクを胸に、まだ見ぬ世界を追い求め作る宮嶋林檎園の味や香りを、ぜひ一度味わってみてください！



はら
まき
ら
↓
統
こ



宮嶋林檎園 代表
株式会社サノバスマス 代表取締役

宮嶋 伸光 さん

〒384-0085 小諸市大字森山 959-11
TEL 0267-22-8175
MAIL miyajimaringo@ctknet.ne.jp

今月の
オモシロ
農家さん